芸術と感性の見当識

大坂芸術大学　教養課程　教授　純丘 曜彰

見当識（orientation）とは、いまここがいつどこかの自覚である。それは、日付や場所に限らず、広く自分の置かれている「状況」の理解ということであり、いまここの所与の事実だけでなく、何がどうなるか、そして、自分は何をでき、何をすべきか、という潜在的な可能や当為の理解と実際の対処までをも含む。

この対局が離人症（depersonalization）だろう。ただし、これは知能的な見当識障害は含まない。むしろいまここの「状況」を知能的には理解しているにもかかわらず、それに対して当事者意識が欠けている、というより、当事者意識を持てないという自覚がある。このため、現実が夢のような仮設的なものとなって、感情も途絶え、状況に積極的に対処する主体性を発揮できない。

この奇妙な障害は、精神医学の臨床現場での患者の愁訴によって知られるようになり、さまざまな解釈が試みられてきた。ひとつには、鬱の一種として器質的な気力（神経伝達物質）の量的不足が原因として疑われるが、しかしこれはまた、受け入れがたい現実に対する、むしろ正常な精神的防御反応であるとも考えられる。一方、解離性障害（統合失調）による認知混乱と見る向きもあり、実際、近世の哲学においては、デカルトが自我の連続創造的な統合、また、心と体の機会因論的な統合を採り上げて以来、自我と当事性はその議論の中心だった。

カントは自我を内外の経験を時空間に位置づける統覚として明確化したが、ヘーゲルではその統合の中心が外化されて逆にその虚像に支配される疎外（Entfremdung）が論じられ、キルケゴールは外の状況に魅惑された自己崩壊の危機に対して単独者として自己を取り返すことを主張した。フッサールもまたむしろあえて当事性という自然的態度を切った離人的判断停止（Epoche）において、あらためて自我による意味付与（noesis）を解明。ハイデッガーは熟知として日常的に物事に付与している意味からして、じつは世人からの借りものであり、自己忘却そのものと喝破。

この議論の流れからすれば、離人症は、認知混乱というより、むしろサルトルの言うように、自己の無という真相の再発見ということになる。見当識を持って人並みに暮らしているという方が、実のところ、世人に埋没し、自己を喪失している。実際、離人症の方が、現実にそぐわない自我の余剰感を強く自覚する。たとえうまく世を渡っているにしても、それは世間から与えられた役の演技であって、本来の自我ではないという軋轢を生じ、それが極まると離人（depersonalization）、役（personality）からの脱落を生じさせる。

ところで、カントは美を目的無き合目的性として定義したが、これは、その対象自体がすでに調和として完結している、ということであり、美はフッサール的な主観による意味付与を拒絶している。たとえば、偉人像は、ただの石であるにもかかわらず、荘厳で勇壮で気高い。だが、我々は、それに声をかけることもできないばかりか、我々が褒めても貶しても、石像は意に介さない。

美は、孤高だ。それは我々になんの役も与えない。かくして、美は人を一種の離人状況に陥れ、世人に溶け込んで忘れていた自己の無、存在としての余剰の真相を再発見させる。「優」という文字が優しいと同時に優れたという意味でも使われるように、その人偏と憂いを合わせた文字の成り立ちからして、本来はむしろ、疎ましい、自分が気後れする、自分の立場が無い、という意味にほかならない。くわえて、美はかならずしも我々にとって快ですらない。むしろその拒絶性ということから、おうおうに不気味で理解しがたいものであったりする。

ところが、我々は、あえてかように疎ましいはずの美を芸術として人為的に創ってまで身近なものとする。このことは、物語において甚だしい。物語において、我々はその創られた世界を理解し、その虚構の中に自己を定位させる。現実は、文字どおり判断停止となるが、物語世界そのものについても、その善悪真偽を問わない。完結している物語世界は、そもそもそのような論評を拒絶する。

我々が登場人物に共感するというのは、性急な誤解だ。我々は物語世界の中に定位するものの、それは日常の現実とは異なる別世界であり、自分が慣れ親しんでいる見当識は通用しない。我々は、登場人物たちほどその世界を知らず、なにが起こるか、なにをすべきかもわからない。かくして我々は物語において、ハイデッガー的な意味で、疎ましい当惑の被投（Geworfenheit、投げ込まれ）に遭う。

しかし、それは旅行に似ている。ここにおいて、我々は積極的にその世界の謎解き、見当識の再構築を試みる。我々は物語の展開に導かれ、さまざまな挙動の断片からそれらの関係を推察し、その世界の潜在的で総体的な公理系を探り出す。そして、おおよそその世界の見当識が得られるとともに、その再構築を導いてきた物語も終わる。このとき、その物語の終わりは、おうおうに、ようやく見当識を得たばかりの物語世界そのものの解体であり、我々は、いやおうなく日常の現実世界に戻らされる。

この意味で、解離性の離人症は、気力低下という器質性の鬱や、自己防御のための現実回避とあいまって当惑の世界から戻れなくなった、その不気味な被投状態での彷徨停滞と考えられる。世界はすでに完結しており、当事者の関与はもちろん論評さえも、それどころか当事者の存在そのものまでも拒絶する。ただし、ここで注意すべきは、離人症患者の当惑の世界というのは、物語世界などではなく、日常社会だということだ。

安定した世界にまどろんでいられた中世はともかく、現代では、ハイデッガーやサルトルを待つまでもなく、我々は生まれながらに自分の生涯の居場所が与えられているほうがまれだ。日常社会はあらかじめ完結しており、拒絶の方がデフォルトになっている。感性、見当識の枠組は、カントのように絶対的で生得的なものではなく、たえずブラッシュアップして、拒絶し、変わりゆく世界に対応していくことが求められる。さもなければ、離人的な自我の脱落を起こす。ここにおいて、芸術は、そのアリアドネ（導き）の糸をも含む、人為的に構築された謎解きの演習であり、日常社会に対する世人所与の自然的態度をいったん切って立ち止まらせることによって、自分自身のものとしての見当識を感性に再構築させるものとなる。